

煩わしさなど、家庭の灯火である母親を困らせ暗くしている問題の何と多いことでしょうか。

以上のような理由から、これらの点についての正しい認識と洞察が幼児教育に必要とされるのでありますが、この仕事にたずさわる者の大多数は、このような問題に経験と関心の少い若い女性で占められているのも一つの問題点であります。

私どもは面接や、環境調査の資料などによって、幼児を取りまく条件はいちおう把握しているはずですが、しかしさらに、その奥にひそむ問題の核心をひきだし、あるいはその訴えに暖い理解と解決の手がかりを与え、ことに母親が広い視野と判断力を身につけて、豊かな情操を養い得るように援助する積極性と方策が、今の私どもに最も要請されるのではないのでしょうか。

それは同じく女性である私ども自身の問題としても。

幼児教育の前進を、はばんでいるものは何であるか——幼児教育の危機説、幼稚園無用論、男性教師導入論などの原因は、女性の勤労意欲の低さ、個々の園に根をはる古いしきたりや天性は——などなど検討の要はないか。

女性が自らの職場の進歩を妨げていることのないよう、冷静に考えてみましょう。まず私どもの人間的成長のためにも。

(幼稚園主任・名古屋)

保育室で思う

山本 光

1. 不安の表情 われかえるほど賑やかな担当の二年保育児の中でただひとり、今もって不安の表情の消えぬA子、常時脇裏を去らぬ問題児。A子の家は使用人数名の商店、母は非常に多忙のようすで一度も顔を見せない。入園半月後父親は私に言った。「A子は左ぎっちゃなんです。この前強制的に治そうとしたら急にどもりになっちゃって……。どもりより左の方が良いと思って止めたのですが、先生、右を使うようにどうかお願いします」と。この父はA子をとても可愛いがっているらしい。私はこの話しにA子がクレオンを持つとき、お弁当の箸を握るとき、私の顔をじっと悲しそうに見上げることに納得がいった。生来の内攻性であったらしいA子に、恐らくは入園を動機としておこなったであろう無理な矯正が、どんなにか大きな圧迫となって幼い心を傷けたであろうか。それが幼稚園全体に対して恐怖の観念となっているらしく思える。登園から帰りまで、絶えず心配そうにしてどんな間にも無言、遊びに誘ってもかたくなにこぼむ。出す声は、困ったときに「おえつ」に似た泣き声だけ。一学期間、私のいくところ、かげのようにしていることで、やっと安定を保っていたらしい。二学期になってからは友だちの遊びを傍観しているのであるが、相変らぬ無表情には不安のかげが去らない。一人だけどうにも浮かび上った存在なのである。私は父親

にあうたびに「不安のしこりをとって幼稚園生活を楽しませることが先決。それから後、左利きがいけないのではなくて両手利きにしましょう」と話す。園生活の中では、比較的好きな動きのリズムで、徐々に自信をつけさせたいと考えるが、大切な家庭の父よりも解つに貰いたい母が、とかくいいそがしい、いそがしいで話し合いにならず、まことに困っている。A子の幸せへの道がここで甚だ遠くなっているように思われる。

2. 公正な評価を。本年五月、園児の入園前と入園後の日常についての質問紙を、保護者に回答提出して頂いた後で、男児Bの熱心な母親から聞かれた。「調査表の質問の欄ですが入園後、Bの質問の数が少くなりましたが、そのような傾向は皆さんの標準の中でどのようなのでしょうか。」知能テストのように数字で解答を得たいようなBの母。この場合その質問が質的に深くなったものか、または外遊びを覚え友だちと遊ぶ時間が多くなり、その回数が少なくなったのかとも考えられ、調査表の項目を整理して得たパーセントの数字だけで答えられるものかどうか窮してしまつた。この例でなくとも多くの父母の方から、「うちの子どもは標準位なら良いと思うのですが」とばくぜんとした間で園生活の評価を求められる。その答がまたばくぜんとしてしまうとき、経験年数をいわずに浪費してきたように思えてゆきづまつてしまう。

子どもはそれぞれに違う。子どもをよく見、知り、広い資料から公正な評価をするということ。評価なしでは保育の向上もないのではないかと思うとき、その考え方や実際を知りたい。

(幼稚園教諭・東京)

自由保育のむずかしさ

島田みつ子

私は、経験一年半で、現在地方の小都市の幼稚園で二十七名の四歳児を受持つている。今日までの教師生活で比較的思うことをさせてもらえた私は、非常に恵まれている。学窓を出たとき、相当の理想を掲げていた。短大二年のときだったか「経済的にも、受持人数にもいろいろ困難のある幼稚園で、自由保育が可能か。」というような問題がだされたことがある。私はそのとき、確信をもって「可能である。」と答え、私なりの方法を論じていた。現代の幼児教育の方向からみても、自由保育でなければ、真に幼児の幸せは与えられない。幼児を抑圧から解放し、本当の要求を認めて、個別的に教育するには、どうしても心理的考慮を充分に施せる自由保育がなされるべきである。

そこまでは、教わつてもきたし、私自身よくわかる。しかし、二十七人を一人で持ち(その人数なら糞沢といわれるかもしれないが)、まるく座れば、身動きのとれないようなところである。室内には、子どもがいつでも欲するときにはできるよう、粘土も備えておきたい、材料棚も、ままごと、イーゼルも、読書をするところも、動植物の飼育も、また、ぼんやりしている子どものかくれ場所も設備したのである。その上、子どもたちは幼稚園の経済におかまいなく、画用紙も大きいものを喜び、布だ、ペンキだ、針金だと要求